
スプレンティッド

パンドラ・L・ロジャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スプレンティッド

【著者名】

ΖΖΓΔ

ΖΖ632Ζ

【作者名】

パンドラ・L・ロジャー

【あらすじ】

その世界では、エアブリッツは誰もが魅了されるスポーツであった。それは飛ばされた800年後も変わりはしない。エアブリッツの試合中、神話の一端としか思われていなかつた『ディセント』が現れ、ヴァンはそのものに触れてしまう。目覚めると、そこは海。そこは、自分が生きた時代より、800年後の世界であった。

プロローグ ～ヴァン編～

その夜のエアブリッツの試合は、ヴァンにとって特別な意味を持つていた。

自身が所属する東代表の『スプレンティッド・グレイス』と南代表の『マッドレイグ』の、トーナメント決勝戦。街中がこの一戦に注目し、スタジアムの観客は超満員に膨れ上がっている。あつと言う間に売れたチケットは高値を呼び、ヴァンに何とか入場する手立てはないかと泣きついてくる女の子まで出る始末だった。

昨年シーズンに華々しくデビューを飾ったヴァンは、その実力が認められて今年、名門スプレンティッド・グレイスのエースとして試合に臨んでいる。たかだか16歳の、しかもアマチュアを卒業したばかりのルーキーの選手に対する扱いは破格であり、それだけヴァンの技量が高く評価されていて、また期待に応える結果を残したことを見ていた。

だが、ヴァンは知っている。

スプレンティッド・グレイスのファン　いや、スプレンティッド中のエアブリッツを愛する人々は、ヴァンをそのまま見ていよい。いつもその華麗なボールさばきや切れ味の鋭いショートの影に、別の男の影を映し出しているのだ。

今では伝説として語り継がれる、スプレンティッドの輝ける星。その男が隠し持つという、必殺のショートを見るためだけに、観客が試合場に殺到した、エアブリッツ界のカリスマ。その男は傲慢にして不遜ながら、常に期待以上の実力をゲームを見せ付けて来た、

大選手　。

英雄の名は、ゼイオン。10年前に海で消息を絶つたヴァンの父親だった。

少なくともそのプレーを直に見ることができた世間の観客、つまりヴァンより若い年代のファンを除けば、ほとんどの連中は昨年、彗星のように登場した新人に、かつての名選手の面影を見ていた。一拳一動に、ゼイオンとの類似を探し、その日よりも10年以上も昔のゲームの話に花を咲かせた。彼らにとって、ヴァンは驚異のルーキーなどではなく、2代目ゼイオン、エアブリッツの英雄の血を受け継いだ“夢”の再来なのだ。

ヴァンはそれが嫌だった。

自分はヴァンという個人であり、誰かの息子などという選手ではない。こと、エアブリッツに関しては、親の七光りで特別扱いされていると見られてはたまらぬと、それこそ血のにじむほど練習してきた。

それに、ヴァンはゼイオンが好きではなかった。まだ幼かった自分にも優しい言葉をかけはせず、相手チームや観客を挑発する時と同じ、自信過剰な見下した態度で接してきた父親　馬鹿にされるのが子供心にも悔しくて、いつも泣いていたように思う。そのうえ、母はその夫にそつこんで、ヴァンをにろくに振り向いてはくれなかつた。

だから、父親が行方不明になり、捜索が打ち切られた時も、悲しいとは思わなかつた。帰つてこなくて良いと本気で考え、そして結局ゼイオンは戻らずに“伝説”となつた。色褪せぬ幻影となつて人々の記憶に焼きつき、今もヴァンを苦しめていた。

『今夜こそ、この影を振り払ってやる』

ヴァンはそう、心に誓つていた。父の偉業を称えて開催された第一次イオン記念トーナメント。その決勝という舞台で、荒くれ者ぞろいのマッドレイクを下ろし、自分は2代目ゼイオンなどではなくエース・ヴァンなのだ、そうスプレンディッドのすべての人々に見せつけてやるのだと。

壁として高くそびえる、大嫌いな男の幻影を越える決意を陽気な笑顔に隠して、ヴァンは運命の一戦に挑む。ゼイオンという観客にとっての自分自身にとつての“夢”を終わらせるために。

しかしこの夜、ヴァンを取り巻く世界は、一瞬にして激変する。

チームの名サポート、リュックからキラーパスを受け取り、シートを相手ゴールに叩き込もうとしたあの瞬間、ヴァンはスプレンディッドに、破壊の嵐が吹き荒れるのを目撃した。

天か、地獄からやつてきた、怒れる巨大な破壊の神『ディセント』。しかしこの神の存在は、神話の一端にしか過ぎないものだと、彼らは想つている。

撃ち出される衝撃波にビル都は崩壊し、ハイウェイは波立つ瓦礫へと変わる。『ディセント』から分離した無数の魔物とも、悪魔ともいえる生き物が撒き散られ、眠らぬ都を混乱の輪廻に陥れた。

そのパニックの中で、ヴァンは父の友人として幼少期より自分を見守ってきた男、ヴィクセンに導かれ、災害の中心『ディセント』そのものに触れることになる。ヴィクセンもろとも、まばゆい光に吸い込まれて、そして……。

そしてヴァンは、見知らぬ海に目覚める。

そこは、800年以上も前にスプレンディッドが滅びた世界。
宗風も常識も、ヴァンの知るものとは違う。しかしどこかに共通
の匂いを残した“スフィア”と呼ばれる世界。『ディセント』の脅威
に怯えながら、魔法文明に生きる人たちが暮らす世界。

ならば自分は、800年後の未来に放り出されてしまったのかと、
ヴァンは不安と孤独に取り残されていた。故郷スプレンディッドは
『ディセント』に滅ぼされ、今は廃墟と化しているという。
属するすべてを チームを、街を、彼を知るすべての人々を、
さらには生きるべき時代も奪い去れ、ヴァンは途方に暮れる。

そんな望みのない中で、彼は一人の娘と出会った。

魔法士になつたばかりの、ヴァンと同じ年の少女『レイナ』。彼
女はその小さな肩に、スフィアの命運を、偉大な魔法士の娘である
という期待を背負い、あの『ディセント』と戦うための長い旅に赴
こうとしていた。

ヴァンはレイナに、スプレンディッドでも自分の境遇と似たもの
を感じた。親の名声から多大な重圧を受け、有名人の血をひくもの
として見られてしまう立場 だが、レイナはヴァンとは違っていた。
人々に敬愛される父を誇りに思い、その思いを勇気へと変えて
困難に立ち向かおうとしているのだった。

故郷の名の残された地を目指し、彼女のたびに同行するうち、ヴァンは気付き始める。

自分とは関わりのない世界だと思われていたこのスフィアでも、

自分は父親を越えなければいけないことを。反発するだけではなく、一人前の男としてその生きざまを乗り越え、ゼイオンの残した意志を成し遂げねばならないということを。

愛すべき少女を救うため、真の勇気を持つて少年は立つ。

そして、終わらない“夢”に終止符を。
。。。

プロローグ レイナ編

志せば、誰もが魔法士になれるといつわけではない。

自然界に存在する物質の原点となる力を解放し、自らからの力にする技能。そして、その幻影魔と祈りを交わし、自らの使役にする能力。

どちらも常人には、存在すら自覚できぬ精神の高次領域を駆使するものであり、とりわけ後者は、強い精神力に恵まれ、またその負担に耐えられる心身の持ち主でなければ使いこなせない、高技能な力である。

つまりは、持つて生まれた素質こそが、魔法士への道を拓く第一の条件であった。生まれ落ちた時点で、まずほとんどの者がこの資質で弾かれることになる。

加えて、可能性ありと見なされても、2、3年は続く従魔法士としての修行で大半が脱落してしまう。才能の芽はあっても、それを伸ばし、幻影魔との対話が出来るまでの苗木へと育て上げる前段階で、強靭な意志を持たぬ者は間違いなく挫折してしまうのだ。

あきらめぬ意志　それは魔法士の、スフィアにおける役割と直結している。

すなわち、生命ある大災害『ティセント』を討ち滅ぼす最前线に立つ、ただ一つの対抗手段であるということ。

鋼で武装した数千の兵も、岩をも碎く大砲も、寺院に禁じられている強大な兵器を用いても退けることのできない『ティセント』を、終わり　すなわち終焉を報せる『ラストマジック』をもって調伏する、スフィアの希望の象徴。

海を割り、大地を揺るがし、大空を覆う、魔物とさえも見えぬほどに巨大な破壊の象徴『ディセント』と、たつたひとりで向かい合い戦い抜こうとする覚悟こそが、志ある者を魔法士たらしめる力の源であった。この意志なくして魔法士の旅を乗り越えることはできず、『ディセント』を倒すために命を捧げた祈り子たちの助力を得ることはできない。ましてや、800年の間に6人しか成し得ていない“終焉魔法”を身につけるなど到底、不可能なのだ。

逆に強い覚悟を胸に抱いていれば、精神的な資質が遅れて花開くこともある。大魔法士に数えられる5人はいずれもそうした遅咲きの才が大成した事例であり、最も若くして『ディセント』を消去のことのできたエイガーでも、修業を始めたのは30をいくつかして越えてからの事だった。

高い素質と、何よりくじけない戦いの意志。それを兼ね備えていなければ、魔法士にはなれない。志す過程で、誰が判別するでもなく、自らそうなるかどうかが決まる類まれなる術者だからこそスフィアの民は魔法士を敬い、“平和”的到来を夢見て尊ぶのだ。

大魔法士エイガーの娘、レイナは、ゆえに尋常ではない期待を一身にあびてこの2年間、ガサノン寺院で徒魔法士としての修行を行つてきていた。

まだ正式な魔法士ではない者に対する過剰な期待は、修業の途中にある者を潰しかねないとして、本来なら避けられるべき行為である。だが、レイナに関してはそれも無理からぬところがあった。長く訪れなかつた“平和”を10年前に達成したエイガーの血を受け継ぐとなれば、資質の点では申しぶんがない。

それに、ガサノン島にすむ者は皆、レイナがどんな娘かを知っていた。10年の成長を隣人として見守つてきた彼らには、レイナが

その血筋からくる素質以上に、魔法士になるにいや、大魔法士となるのに相応しい魂の持主であることがわかつっていたのだ。

それほどまでに、レイナの覚悟は際立っていた。従魔法士となつた頃から、少女の立ち振る舞いはすでに魔法士のそれであった。常に入々の希望として見られていることを意識し、その重圧をもろともせずに凜と立つ健気な姿。

若さ、未熟さから当然、生じるであろう迷いも決して面には出さず、弱音を吐くこともなく厳しい精神修行を続けてきたレイナは、寺院と祈り子を通じて数多くの魔法士をしてきたガサノン島の民から見ても、一際輝いた存在であつたのだ。

しかしながら 。

その驚くまでの覚悟をわずか16歳の少女が固めているということは、裏を返せばそれだけ、スフィア世界が追い詰められているということを意味している。

南海の島ガサノンの明るい風景も、ふと周りを見渡せば、『ディセント』の連れてくる死の影と悲しみに満ち溢あふれている。

人々の笑顔の下には、いつ襲つてくるかもしれぬ厄災やくさいへの恐怖が隠され、無念のままに生命を奪われた者は心を失った異形の魔物となつて、大地を徘徊はいする。

『ディセント』の引き起こす痛みで、世界はちぎられてしまいそうになつていた。

少女はスフィアを愛していた。そこに住むすべての人々が好きだつた。空も海も大地も、太陽も月も、朝も夜も自分を生みだしてくれたすべてのモノが愛おしかつた。

だから、何としても『ディセント』を止めたかった。“死”に魅み

入られたスフィアの悲しみを消し去るという父の望みを、今度こそ自分の手で実現したかった。レイナが『ディセント』を倒し、そしてもしもメンダークスの教え通り、人間の罪が償つぶなわれていたら、もう悲しみが蘇よみがえることは一度とないのだ。

スフィアに幸福をも望まない。自分の幸せは人々の、心からの笑顔とともにある。愛するスフィア世界に“平和”という贈りものをするためにレイナは魔法士になり、誰よりも強い覚悟で旅立とうとしていたのだ。

もちろん、この少女の無残なまでの決意を、押しとどめたいと思う者たちもいた。

兄の、姉のように、家族同然に育つてきた者。

幼い頃から守り、そうすることでお救わってきた者。

血の繋つながりから彼女を止めようとする者。

この過酷な運命を背負うのがなぜレイナでなければならないのかと、彼らは苦悩し、少女の意志のひるがえりはしないかと、あり得ない可能性に望みを馳せる。

それでも彼らは誰も、レイナの内側に立ち入って、強引に彼女を止めようとはしなかった。いや、できなかつた。『ディセント』と戦う覚悟と引き換えに魔法士に与えられる自由は、何者にも侵ざる聖域であることを、スフィアの枠の中で生きている者たちは皆、骨の髄まで叩き込まれていて。

長い間続くしきたりに自縛された彼らの、強張つて動かぬ指をすり抜けて、少女は今、後戻りのできぬ道に踏み出そうとしていた。人の罪を背負いて、荒野に捧げられる生け贋いけにえの山羊のように。

旅立ちの前日、ガサノン島にやつてきた異邦人いはうじん　スフィアの常識に囚われない、心のままに思いをぶつける少年が、少しずつ運命の歯車の噛み合いをずらし始める。予定調和の螺旋から外れた新し

い未来へと、レイナを導いていく。

800年の理の外にある、新の希望を目指して。

て。

プロローグ ルー編

ルーはいつも考える。

それで良いのかな？これが本当に一番の方法かな？昔からそうだったからって、今も従わなきやいけないのかな？

メンダークスの教えでは、機械を使つてはいけないことになつてゐる。800年前に、『ディセント』が現れてスフィア世界を壊し始めたのは、今までの人類が機械に頼りきて、しまいには自然、いやスフィアを滅びしかねないぐらいの力を持つ機械を作つたから。その機械の使用方法は、政府の一部しか知らない　いや、もしかしたら彼らすらも知らないかもしない。

人間がその罪を償い終えるまで、『ディセント』は決して滅びはない。だから寺院は機械類を禁じ、スフィアに生きるほとんどの民は、それに従つている。

『でも……』

と、ルーは疑問を投げかける。誰もが当たり前と決めつけて、考へること無く通り過ぎてしまう場所で、彼女は立ち止る。そして、理由を考える。すぐに答えを見つけ出すことが出来なくとも　。

ノドウス族には、ヒトとは少しだけ違う身体的特徴がある。

ノドウスの民の目は、エメラルドを思わせる緑色。ここに違ひがある。その瞳の中に浮き出た、金色の渦上の模様。『ディセント』が現れるよりずっと前からスフィア辺境の島々で他地域から隔絶して暮らしてきたノドウスの民は、いつしかこのような、小さいがはつきりとした人ととの差異を獲得することが出来たのだ。

近くで見つめあえれば、いや、少し遠とお田から見ただけでも誰もがノ

ドウス族を見分けることが出来る。子供でも、簡単に。そうやって区別されて、ノドウス族は寺院から迫害を受けてきた。メンダークスの教えを受け容れず、寺院に伺いを立てること無く機械を使うノドウスは、メンダークスを信じる者から人間が一丸となつて行わねばならない贖罪を妨げる、畏れを知らない罪深い者たちなのだ。スマグルを中心とする寺院が絶対の権威を持つスフィアでは、それに従わない者は当然のように排他される。“ノドウス嫌い”という言葉がごく普通のように使われ、ノドウス族は多くの場合、要らぬトラブルを避けるために、ゴーグルやサングラスをかけ、その特徴的な瞳を隠している。

嫌われ者のノドウス族に属しながら、それでもルーは悲観しない。スフィアの人々を困らせるために一族が、無理矢理に機械を使っているのなら、それは責められても仕方のないことだろう。ルーもあきらめて、まずは自分の側の非を正していくほかない。

しかし、ノドウス族が機械に頼るのには理由がある。

第一に、そうしなければ一族はとっくに滅んでいた。故郷の島を『ディセント』によつて襲われ、散り散りになつた民のノドウス族は、機械を活用することで何とか命をつなぎ止めてきたのだ。もし先祖がメンダークスの教えに従い、機械を捨てていたら、この時代に自分が存在すらしないことをルーは知つている。

それに、メンダークスの教えの外側にいる彼らは、寺院が強いる機械禁止の根拠が明確に記されていない事実に気付いている。『ディセント』が生まれたのは人間が機械に甘えたから その教えを人々は疑わずに信じているが、実際のところそれが事実なのかどうか、証明できる確かな記録が寺院から提示されたことはない。そればかりか、人間が罪を償いきれば『ディセント』は永遠に消え去るという、スフィアの民の生きる支えともいべき教えさえ、いつそれを知り得たのかを、寺院はうやむやにしている。

皆みなが寺院の教えにすがりつきたい気持ちは、ルーにも分かる。それほどまでに『ディセント』は恐ろしい。スフィアに恐怖を撒き散まちらす、巨大な実態をもつ厄災やくさいなのだ。襲われれば、人間は踏みにじられるしかない。それを直視するのが怖くて、人々はメンダークスを盲目的に信じる。考えることをやめて、寺院の後について歩いていく。変わらない道を、変わらない世界を。

ノドウス族は ルーは考える。もし、メンダークスの教えが何の裏付けもない、都合のいい夢を見せるだけの甘い子守り歌だとしたら、そこに留まることは本当に正しいのかと。いつやつてくるか誰も知らない いや、決してくることがないのかも知れない、すべての罪が清算せいさんされる日を待ち続けて、『ディセント』との戦いを魔法士たちだけに任せて動かさにいることが、はたして人間の選ぶ道なのかと。

だからノドウスは機械を放棄ほきしない。それを捨てて、無抵抗に許しを乞うより、機械の力を武器にし『ディセント』に立ち向かいたいと願う。

自分の頭で考えること 、自分の足で立つことをやめてしまいたくない。ノドウス族の指針しえんの根の底にあるこの思いを、ルーは何より正しいと感じている。

問題を解決する力は、状況に甘えず努力する姿勢なしには生まれはしないのだ。

メンダークスを信じてきた人々がノドウスの考え方を理解するのは容易ではないことだろう。それでも、死んでしまった人間を生き返らすような、全くの不可能事ふかのうじとは違うとルーは思う。いつの日か、メンダークスの民とノドウスは解り合える……いや、解り合えるよう、精いっぱい頑張つていかなければならぬのだ。

そのためには、ルー自身がもつと、ノドウス以外の事を知らないといけない。

一族の多くは、仲間の内でしか通用しないノドウス語を話し、スフィアのほとんどの地域・種族で使われる言葉を覚えようともしないが、ルーはこの共通語も懸命に学んで、ほぼ完ぺきに操れるようになった。誰にでも、伝えたいことをちゃんと理解してもらうために。自分たちとは違う生活を営んでいる人々の考え方を、誤解せずにきちんと受け取れるように。

そうやって解り合つて、メンダーカスとノドウスが一緒に力を合わせたなら、もしかしたら『ディセント』を何とかする方法が見つかることもしない。永遠に続く“平和”を創り出す最良の作戦を。

そんなことは無理だと、誰もが鼻で笑つてあきらめてしまうことも、ルーは真剣に自分の頭で考える、考え続ける。そしてそれが正しいと思ったなら、一族に逆らつてでも自分の意思に従う。そうすることのが結局は、ノドウスらしいのだと。

しかし、熱意はあっても、ルー一人では何も状況が変わらないことを、自分が一番知っている。

だが、ある日を境に変わり始める。それは、孤島の寺院跡で、ノドウス以上に奇異な服装に身を包んだ少年を見つけた日。

決して解り合つことのない種族が、掛け橋により、解り始める。

プロローグ ルー編（後書き）

漢字の間違いなどあつたら、教えてくださいねー。

気がつけば、ヴァンは海の上に立っていた。と言つても、水面上に立つていたわけではない。海面はひざの部分で途切れている。しかし、ヴァンはすぐに異常に気付く。足元に海底はないそう、自分はおそらく一瞬のうちに、^{たいかい}大海の海面部分にいるだけにすぎない。今から海底に向かって沈んでいくのだと。

ヴァンは、己の能力^{ちから}により、自分が海底より150mの場所にいると氣づく。ヴァン自身は、あまり泳ぐことは得意ではない。目視では砂浜まで、約50m。泳いで行くのはなんでもないが、そのような労力を使うことはない。

試合以外では使わないと心に誓つていたが、自らの能力を使う。ヴァンはそのまま歩いていく。いや、泳いでいるわけではない。^{ちか}ゆえに、海面はひざの位置。さらにヴァンは上昇し、水面上に足裏^{あしうら}を置き、歩き始める。何も、水の上で歩けるという能力で、水面上に出たわけではない、濡れるのが面倒なだけなのだ。

ヴァンはそのまま50mを歩き切る。砂浜に立ち、改めて状況理^{じょうきょうり}_り解^{りかい}に移^{うつ}とする。砂浜に膝をつき、周りを見る。

明らかに、スプレンティッドではない。野性^{やせい}を連想させるジャングル、南海を感じさせる海。それに、今は朝だ。通常のエアブリッツの試合は昼に行われるので、問題はないが、今行っていた試合は決勝戦。のような大舞台は夜で行われるのだ。

思わずため息を漏^もらす、ヴァン。なぜこうなったのか、原因であるモノはおおかた解^{わか}つていたが、なぜそうなったのかが解らない。

そもそも、こつなつたのはおよそ30分前に、いや。正確には800年と30分前にさかのぼる。

～800年と30分前～

ヴァンはスプレンディッド・グレイスの控室のベンチで、ため息をついていた。

他のメンバーは、たがいにボールを回し、練習というより、確認をしている。しかし、リュックは遊び半分で、メンバーにボールの代わりにアルマジロのような人形を投げていたりするのを、ヴァンは知っている。

ヴァンの脳裏に焼きつくるはいつもある男の顔が、あの憎たらしい表情が浮かんでいた。

男の名は、ゼイオン。10年前で海で消息を絶つた、ヴァンの父親だった。

ゼイオンはエアブリッツを愛し、さらには敬愛もしていた。心の底から愛し、楽しんでいた。息子のヴァンにも幼き時からその面白さを知つてもううように、エアブリッツを教えて来た。

しかし、その愛情はヴァンには伝わらない。ヴァンにとって、ゼイオンは憎むべき存在であった。

いつも馬鹿バカにするような態度で接してきたゼイオンは、ヴァンにとって、敵対のまなざしで見るべき者なのだ。

だからと言って、ゼイオンがヴァンを嫌っているわけではない。言動も荒々（あらあら）しく乱暴者らんばうものであつたが本質的には愛情深い

人間ではあるのだ。しかし不器用で、優しさを上手く表現できなかつただけなのである。

そのために息子ヴァンからも反感を買ひ、ついには理解し合えぬままに生き別れた。

ヴァンは親が生き別れて、悲しいとは思つていなかつた。しかし、人々のまぶたに焼き付いた伝説は、今もヴァンを苦しんでいた。

今日の試合は、そんな観客のイメージを振り払うためのものであつた。

ヴァンは知つている。自分はルーキーではないことを。2代目なのだとこいつことを。

だから、今日は今まで以上の練習を重ねて來た。そのため、ゼイオンが隠し持つていたとされる、必殺のショートも覚えた。

『いや、待てよ……』

ヴァンは思つた。この試合中で、ゼイオンの技を使えばそれは、自ら自身は2代目ゼイオンであると主張するのと同じである。その意志をくつがえしたいのなら、それをも超えるショートを放たなければならぬのだ。

『どうすればいいんだ……』

ヴァンは苦惱する。ゼイオンのショートを覚えるだけでも、身を滅ぼす思いで身につけてきた。それを越える思いでやるとなれば、この上なく危険である。

「やつ考えるなよ」

正面からかけられた声に、ヴァンは顔を上げる。そこには、アルマジロのボールを得意げに持ったリュックがいた。

「……何が？」

この気持ちはチームのメンバーには誰ひとり明かしたことはない。それが大親友のリュックであっても。

「自分ひとりで抱えるなって。オレ、知ってるぜ?」

ヴァンはドキッとした。父親を越えるなどとある意味、無理な目標を、観客はおろか、チームメイトには知られてはいけないと思つたからだ。

「みんなお前に期待してるけど、その期待に応えようなんて思わなくて良い。ヴァンはヴァンだ。『2代目だれだれ』なんて選手じゃない」

やはり、見抜かれている。ヴァンは、リュックなら話していくかも、と思つた。

「そうだよな、よしーサンキュー、リュック。お前のおかげで、何とか元気になれた」

「ハハ、そりゃ良かつた」

ヴァンはベンチから立ちあがり、腰に両手をあて、大きく伸びをした。リュックはアルマジロボールをチームメイトに投げ、その度

に、まだリュックの餌食にあっていないメンバーが驚いている。

「や、行こ。オレのけじめをつける時が来た」

リュックはヴァンに背を向け、チームメンバーのほうに向かって口の周りに、手でメガホンのような形を作った。

「おまえら！」

騒いでいた連中が、急に静かになる。リュックの放つ言葉には、なぜか説得力があるのをチームメンバーは知っている。

リュックはヴァンの目の前に立っていたが、少し横に移動し、メンバー全員にヴァンの顔が見えるようにした。ヴァンは一瞬驚いたが、すべてを悟った。自分が何か言わなければならないのだと。

「マッドレイクなんて屁^へだ！オレ達が、最強だ！」

「ヨツシャー！」「やつてやるぜ！」などの言葉を口々に叫びながらはしゃぐメンバーを見て、ヴァンは微笑む。ここには、自分を必要としている人達がいる。ヴァンという個人を必要しているのだと。

（試合直前）

ヴァンは^{あぜん}睡然した。これほどまでに自分たちの試合を見に来ている人達がいるものかと。スプレンティッド中の人間がエアブリッツを好きなのは知っているが、まさかその全員が来れるほど観客席を超満員に出来るとは。

まあ、それも当然だと、ヴァンは心のどこかで思っている。皆が皆、そうであるとは限らないが、ほとんどの連中はヴァンを見に来ている。そう思うたび、胸が締め付けられた。

さあ、試合だ。エアブリッツは、自分を ヴァンを表す、最大の行為なのだ。

そもそも、エアブリッツとは何なのか。

エアブリッツとは、近年に開発された、最新機械を使う、スポーツである。

2つのチームの選手たちが、1チーム6人、計12人でボールを奪い合い、得点を争う。フィールド内のどこからでもバスやシュートが可能であり、ボールの取り合いにおいては激しく選手たちがタックルし合うなど、非常に自由度の高い競技で、“空中格闘球技”とも呼ばれている。

エアブリッツの名前の由来は、決められた $150 \times 100\text{ m}$ の敷地内^{しきちない}で縦横無尽^{じゆうよひむじん}にエアブリッツ専用のブーツ ホバー・ブーツをはき、行動する。足裏から出される強力な火力によって空中に浮き、ボールを相手ゴールに入れることも呼んでいる。

人によって、このスポーツに対する見方が違っているが、ヴァンにとつては、“人生そのもの”なのだ。それは、彼の父であるゼイオンに関しても変わらない。

彼ら親子にとって、エアブリッツは自分自身の ヴァンに限つてはゼイオンに対する 挑戦なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7632z/>

スプレンディッド

2011年12月27日22時54分発行